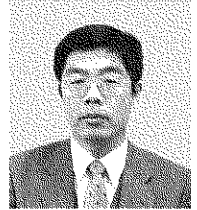


ニューガラスフォーラムの意義

通商産業省生活産業局窯業建材課長 田中 正躬



わが国の先端技術分野についての経済的な成功は、多くの欧米の人々の注目されるところとなっている。その1つに、民間企業間での共同した研究開発活動とか、情報交流の活動があげられる。繁栄する半導体製造技術の基礎を作ったと言える超LSD技術研究組合の成功は欧米諸国の人々が日本のやり方に関心を向ける一つのきっかけをつくった例である。欧米にも大学や国立研究機関を中心とする複数の民間企業が参加する共同研究や情報交流の場はいくつか見られるものの、日本のように多くの民間企業が中心となって研究や情報交流を行う場は多くない。わが国では研究組合の他、光産業技術振興協会、ファインセラミックス協会、バイオインダストリー協会等近年多くの場が作られた。ニューガラスフォーラムも後者の例の1つである。これらの民間企業による共同の活動は、共同研究のほか、データベースの利用、標準化に係わるもの、セミナーや海外との情報交流の接点等、民間企業が公開できる分野 (non-proprietary) の情報の相互の開示と共同利用を特徴

とする。さらに重要なことは、政府との密接な関係を持ちつつ活動を行っていることである。

欧米の人々にとっては、競争企業間における密接な活動は本当にうまくワークするのか、また独禁法上問題はないか、また民間と通産省が一体となったやり方はフェアでない等の疑問ないし、批判がかわされてきた。しかし

- 1) 背景の異なる企業群が集まり特定の技術分野についての集中的な研究あるいは情報交換を行うことは異なった技術の融合をもたらすこと
- 2) 政府と民間の間での政策をスムーズに進めていくための1つの政策コミュニティがつけられ、好ましい政府・産業界間関係が出来上がること
- 3) 広範な機会を見出せる可能性のある研究領域を民間企業の集団で特定し、そこへ研究資源の投入を行うこと

といった積極的な役割に注目が集まっている。

日本のやり方は、長い経済社会の発展の過程でつちかわれてきたものであり、現時点で欧米人の批判をも取入れ反省すべきところは改めていく必要があるが、新しい社会へ向けて如何に新しい技術領域に取り組んで

いくかということにたいして1つの手がかりを与えるやり方である。ニューグラスフォーラムも将来へ向けてその活動の真価が今後試されていく訳である。

